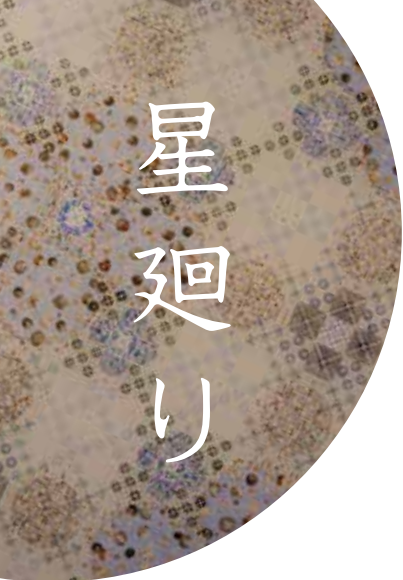




星廻り

鳥山秀直

鳥山秀直

2025 11.29 sat – 12.21sun

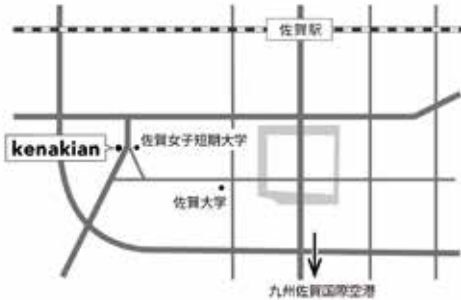
11：00 – 18：00 月曜休み

オープニングレセプション

11.29 sat 17:00-

kenakian

〒840-0027 佐賀県佐賀市本庄町本庄1272-3
Tel：0952-97-5044 Email：info@kenakian.jp



星廻りとは、人間の運命を左右する星の巡り合わせという。画面に向き合っているとふと思うことがある。描かれているのか、描かされているのかと。描くことで起こる現象を次の画面でも同様に描くのか、または別のアプローチで描くのか。一旦画面から離れ次へと取り掛かるが、またここでも似た考えが起き、を反復するうちに、作品らは緩やかに差異を生じつつ現実世界に現れてくる。

絵とは、制作とは何を指すのか。自身と絵を取り巻く状況を見つめる。日々、目紛しく変化する社会情勢や生活の中で重層化する記憶や感情、制作に必要な道具や材料と表現媒体の検証を含めた行為と実践、費やす時間。あらゆる要素が関係し結びつき、生成と膨張を繰り返しながら新たな課題と更なる展開が生まれていく。

それは、想像と現実双方の空間に散らばった星々のようであり、それら無数の起点を往来可能な私は廻り、媒体となって表出する画面を絵画、あるいはその周辺と呼ぶのかもしれない。

巡り合わせや運命というのは些か大袈裟ではあるが、そのように考えている。

鳥山秀直（画家）

1978 長崎生まれ 長崎在住
2003 多摩美術大学美術学部絵画学科油画専攻卒業

主な個展
2023「G3-Vol.152 絵画になる時間」熊本市現代美術館(熊本)
2020「まばたきさえ - 散りばめられた時間と集積 - 」アズマティブプロジェクト(神奈川)
2013「トキアートスペース企画シリーズ "Critical Painting"」TOKI Art Space(東京)

主なグループ展
2024「現実63」AIR motomoto(熊本)
2023「HAKOBUNE-放射するアート」諸磯青少年センター(神奈川)
2020「VIVIDOR-人生を謳歌する人」アズマティブプロジェクト(神奈川)
2019「Possible or not impossible」アズマティブプロジェクト(神奈川)
「Memento mori 昨日、今日、明日、」アズマティブプロジェクト(神奈川)
2016「Japan im Palazzo」Kunsthalle Palazzo(リースタル/スイス)
2015「中国広州日本現代アート展2015」53美術館(広東省/中国)
2014「songs for a pigeon」在日スイス大使館・gallery COEXIST-TOKYO(東京)
「西宮船坂ビエンナーレ2014」(兵庫)
2012「行為の触覚 反復の思考」上野の森美術館(東京)
2010「Open Studio」Atelierhaus Arlesheim(バーゼル/スイス)

Special Events presented by Karasuyama × kenakian

ライブパフォーマンス

11.30 sun 15:00-16:30

ソフトコンクリート(齋藤浩太＋東亭順) with 里実咲

ソフトコンクリート (サウンド＆アート・パフォーマンス・デュオ)

2019年横浜市伊勢佐木町「マンナ」にて齋藤浩太と東亭順により結成。
身近な素材で創作された振動、その場で創作される物体や空間、現場で蠢く気配を取り込み、成功も失敗もないその場限りの即興を行うミドル世代。そこにゲストを加え予測不能の駆け引きを楽しみます。

主な公演/展覧会
2025「The City of Basel and the Rhein」Ausstellungsraum Klingental(スイス)
2023「#37.2 Our Blue Earth」アズマティブプロジェクト(神奈川)
2023「Halloweenpic」with Niya Chat Noir(神奈川)
2022「la Seine」with PEI & 鳥亭 アズマティブプロジェクト(神奈川)
2022「素敵な泉 I, II, IV」Thumbs UP(神奈川)
2020「#18 Soft or Hard-Three weeks with Soft-Concrete」アズマティブプロジェクト(神奈川)
2019「#10The world never ends」アズマティブプロジェクト(神奈川)

齋藤浩太（音楽家、翻訳家）

1974 横浜生まれ 横浜在住
オルタナティブ・ブルースバンドGLDN(2002～2025)を率いたほか、即興を軸としたソロやプロジェクトで演奏。また映像作品への楽曲提供も行なっている。訳書にチャールズ・ウィルフォード『コックファイター』、ハリー・クルーズ『ゴスペルシンガー』(共に扶桑社)。

漂う点、交わらぬ線
人間鳥山秀直の曰く言い難い性癖と苦悩の色は何色だろう、とふと考えたことがある。地元長崎は総じて海山青く大地は肥沃、産する野菜も鮮やかな色である。そこで鳥山は笑っているのだが、生息地である諫早や大村に感じる独特の抜けと停滞をパレットに加えたあたりから、結局何色と呼ぶべきなのかよくわからなくなるのだった。10年ほど前はじめて会った頃の鳥山の作品は、鮮やかなブルーが占める割合が高かったように思う。いま画面はくすみの色を帯びはじめている。それは様々な土地で採取した砂石塵芥を元に顔料を作り使いはじめた時期と重なっているのだろうが、それだけではないだろう。
無数の点でできたパターンが配置され線が浮かびあがる作品らは整然としている。しかし近づいてみると点は思いのほか歪に漂って、線は決して交わらない。つまりそこに鳥山がいる。構成されたあの整然は、彼の「そうであってほしい世界」なのだろうか。

東亭順（現代美術家、AZP代表、藝術喫茶パロマとヴォルケンホフ運営、愛犬家）
1973 東京生まれ 横浜在住
HKG FHNW 修士課程中退(スイス)
2009～2015をスイスやドイツを拠点に活動。ソロ活動以外にアート・ユニットsongs for a pigeonやライブ・パフォーマンス・ユニット鳥亭を結成し、実験的な発表を続ける。2018年に横浜市伊勢佐木町にアーティスト・ラン・スペース創造的実験場を発足、次回で40回目の企画を予定している。

ミクストメディアと作品のキャプションに表記する作家は多い。鳥山もタブローにそう記し続けてきたが、その内容を近年大幅に更新しているように見える。誰も気に留めないような物を収集し、絵具になるよう粉碎して小さきまざの瓶に詰める。さらに拾い集める姿を映像で記録。展覧会では、瓶詰め顔料をテーブルに陳列し長編記録映像を上映、メモ書きされた紙を貼りつけた大量のドローイングの奥に集大成となるタブロー。それは一見すると既製の絵具で描かれた数年前の作品とあまり大差がない。しかし、タブローを支えているこれら複数の異なるメディアたちが、これでもかという物量に任せて押し寄せ「もっとよく見ろ」と声をあげる。メモや瓶に書かれた肉筆、映像に映し出される孤独な姿。もはや作家自身さえも一枚のタブローを支えるメディアとなりつつある。この「星廻り」にわれわれのパフォーマンスも取り込むつもりなのだろう。そう成るか否か。

里実咲（芸術家）

1998 長崎生まれ 東京在住
2025 武蔵野美術大学通信教育課程油絵学科在籍
2022「わいの、あたいの(芸術)祭り」アズマティブプロジェクト(神奈川)

鳥山先生の作品に歩み寄り間近で見ると、ひとつひとつの点にゆらぎがある。オーガンジーに顔料が染み入ってできたゆらぎ。筆を握る手が震えてできたゆらぎ。顔料が思いのほか流動的に動いた時にできたゆらぎ。作品はその全体を視野に収めると神経質とも言えるような、統制された規則正しさとで完成して見えるが、点のひとつひとつを見つめると、それぞれのストーリーが見えてくる。先生の美術予備校に通っていた私は、制作する風景を目のあたりにしていた。初めてその光景を見た際、整然とした作品の見た目は裏腹に、制作するスペースと日常生活に近い距離であることにギャップを覚えている。生徒が行き交う廊下のそばの部屋で、ある時は真夏に空調もない屋根裏のような部屋で制作していた。それから数年がたった今、先生は繁華街の側溝で、海辺で、範囲を拡張し絵画制作を続けている。私はいつも驚いてばかりだ。

トークショー

12.20 sun 15:00-16:30

石井琢郎 諏訪未知 鳥山秀直

石井琢郎（彫刻家）

1979 長崎生まれ 埼玉在住
2009 東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程
美術専攻彫刻研究領域博士(美術)修了

主な個展
2024「礼拝堂に石が在る」本多記念教会(東京)
「饒舌 | 沈黙」印西市文化ホール(千葉)
2019「One stone」アズマティブプロジェクト(神奈川)
2017「肌理のつらなり」秋山画廊(東京)
2015「Reach into it」さいたま市プラザノース(埼玉)
主なグループ展
2023「戯け」美濃加茂市旧櫻井邸(岐阜)
2021「さいたま国際芸術祭 市民プロジェクト 時のきざし」(埼玉)
「物と視点」Kumagusuku(京都)
2020「before sunrise after dark」アズマティブプロジェクト(神奈川)
2019「Art session Tsukuba 2019」(茨城)
「Memento mori 昨日、今日、明日、」アズマティブプロジェクト(神奈川)
2016「KAAT突然ミュージアム2016」神奈川芸術劇場(神奈川)
2014「Rokko meets art 2014」(兵庫)
2012「行為の触覚 反復の思考」上野の森美術館(東京)

私は石の内側を彫っている。内側を彫っていくとやがて石には穴が開き、その瞬間、内と外の関係が一瞬にして変化する。といった言葉は、作品の構造を示す言葉であるが、作品を作品たらしめるものは、貫通した部分のエッジの形状や見え方、作品自身の体感的な重さといった、言語化できない部分である。鳥山は、「絵画」への構造的アプローチとして、木枠を円柱にし、エッジをなくすことで画面の終わりを無効化する。また、正方形に作られた支持体の形を作品内に取り込み、フラクタルを作り出すことで絵画における枠の問題を無効化し、絵画の拡張性を効果的に作品化している。しかし、それは構造的な問題であり、作品を作品たらしめているものは、一つ一つの素材の選択であり、隣り合う色の選択、手間と時間が費やされた画面へのこだわりといった、感覚的な判断により選択された数々の行為の蓄積に他ならない。理性的に思考された構造の上に、非言語的感性が形を描き出す。その拮抗の中に一つの美が立ち上がっている。

諏訪未知（美術家）

1980 神奈川県生まれ 神奈川在住
2005 多摩美術大学大学院美術研究科絵画専攻油画研究領域修了

主な個展
2024「Knife Rest」gallery21yo-j(東京)
2022「Project N 86 諏訪未知」東京オペラシティアートギャラリー(東京)
2020「3つの世界」KAYOKOYUKI(東京)
「風の回転、水の落下」アズマティブプロジェクト(神奈川)
主なグループ展
2022「Letters, Lights, Travels on the Street (僕らが旅に出る理由)」Curated by Jeffrey Rosen」NOWHERE(ニューヨーク)
「ヘリオトロープ」照恩寺(東京)
2022「VOCA展2020」現代美術の展望」上野の森美術館(東京)
2018「絵画の現在」府中市美術館(東京)
2012「行為の触覚 反復の思考」上野の森美術館(東京)

鳥山くんの絵の木枠が円柱の木材で作られるようになったとき、とても腑に落ちたことを思い出す。
あの角張った立ち上がりへの愛憎は、絵描きの目の端でいつも燦っている。丸い縁は揺れを拒まない。むしろ待っている。そこに貼られた透ける表面は、まるで蜘蛛の巣みたいだ。
鳥山くんは蜘蛛の巣に掛かりながら、そこを揺らし、繰り返し息を潜めて点を穿つ。
その振動を丸い縁が吸収し終えると、透ける表面は静かに、手前と奥のどこかに位置をとり戻す。
獲物がかかるたびに揺れては静まり、また位置をとり戻す。その繰り返しの中で、ゆっくりと絵が現れるのだと思う。
私もまた、蜘蛛の巣にかかったようにその揺れを眺める。
ゆっくりと引き伸ばされた時間が、丸い縁から波を打って、光りながら集まってくる。